

竹内実 著
吉田富夫

志のうた 中華愛誦詩選

伯夷・叔齊から毛沢東まで

中公新書

1034

竹内実著
吉田富夫

志のうた 中華愛誦詩選

伯夷・叔齊から毛沢東まで

中央公論社刊

竹内 実 (たけうち・みのる)

1923年(大正12年), 中国山東省に生まれる。
1949年, 京都大学文学部卒業。現在, 立命館
大学国際関係学部教授。京都大学名誉教授。
中国文学, 現代中国論専攻。

著書『中国の思想』『現代中国の展開』(NH
Kブックス), 『魯迅遠景』『魯迅周辺』
(田畑書店), 『中国喫茶詩話』(淡交社),
『中国を読むキーワード』(蒼蒼社),
『毛沢東』(岩波新書), 『愛のうた』(中
公新書), 『閑適のうた』(共著, 同上)
他

吉田富夫 (よしだ・とみお)

1935年(昭和10年), 広島県に生まれる。
1958年, 京都大学文学部卒業。現在, 佛教大
学文学部教授。現代中国文学史専攻。

著書『革命論集』(共著, 朝日新聞社), 『文
化と革命』(共著, 三一書房), 『五四の
詩人王統照』(同朋社), 『反転する現代
中国』(研文出版)

志のうた
中公新書 1034

© 1991年

検印廃止

1991年 8 月15日印刷

1991年 8 月25日発行

著 者 竹 内 実
吉 田 富 夫
発行者 嶋 中 鵬 二

本文印刷 三晃印刷
カバー印刷 大熊整美堂
製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7
振替東京 2-34

Printed in Japan

ISBN4-12-101034-5

まえがき

志。

こころざし。こころが、さ（指）す。

こころは気分、氣もち。拡散してとらえどころがない。ころ、ころ、変りもする。

それがあるとき、一つの方向をめざすようになる。それにつれて肉体がうごき、社会、世間のなかで足跡を残して歩きだす。十五歳のとき、学問にこころざした、と孔子はいう。そうだとすると、それまでは、とらえどころのない、ふわふわしたものであったろう。

吾^{われ} 十有五にして学^{がく}に志し、三十にして立つ。四十にして惑^{まど}わず。五十にして天命^{てんめい}を知り、六十にして耳順^{したがつ}う。七十にして、心の欲^{ほつ}するところに従って、矩^{のり}を踰^こえず。

『論語』為政篇

そのころ、学校のようなものがあつたかどうかは、いちがいに断定できないとしても、いかに

も確固として疑いを残さない「学^{がく}」といういいかたは、すでにある種の知識の体系が、十五歳の孔子の眼前にあったことをうかがわせる。

こんにちのような学校はなくても、集団生活をする塾のようなものがあって、そこにはこの知識の体系を身にそなえた人間がいて、教師の役割をになっていたであろう。

とにかく、国家というものがあったから、政治が実施され、税もとりたてていた。とすれば、役人がいたし（孔子も役人になったことがある）、役人になるためには、読み、書き、それに足^たし算、引き算ぐらいは一とお心得ていなければならぬ。「学」と呼ばれるものが、すでにあっても不思議ではない。

しかしながら、「学」が確固としているのは、これを学ぼうという「志」が強烈であるからでもある。学生がいなくては、教師は存在せず、学ぶ意欲がないのに、教えるという行為があるはずもない。

孔子は紀元前六世紀なかばから紀元前五世紀なかば（よりやや以前）まで、生きた。いわゆる春秋時代の末期である。

春秋時代につづく戦国時代は、紀元前四世紀（くわしくは五世紀の終りごろ）から、紀元前三世紀のかなり下った、秦始皇帝の天下統一までをいう。

この時代はじつにさまざまな学説があらわれ、儒家をはじめ、道、陰陽、法、名、墨、縦横、

農の諸家、はては雑家、小説家。それらは学説や思想をもとに集団をつくり、集団のなかで教え、学んでいた。つまりは「志」をもつ人間のあつまり、志士集団であった。

考えてみると、孔子を中心に弟子たちが集まっていたのだから、戦国時代よりまえ、春秋時代にすでに志士集団が生まれていたわけである。

こんにちからみれば、かれら志士たちは知識人であった。どういふものか、中華世界は、政治にたいする関心が強い。人間にたいして関心をもつため、しかも人間の現実、現実的利益に関心をもつため、それは政治論になり、政治的技術としての思想になる。知識人としての責任感、使命感はたらく。「志」は、政治と深く結びつく。

結びつく、ということは、政治への迎合、妥協を意味せず、むしろ潔癖なまでに政治の理想化を求めるのである。

匹夫^{ひつぶ}も志を奪うべからず。

『論語』子罕篇^{しかん}

身分の低い男。いわゆる庶民が匹夫。匹はたった一つ。身分の高いひとは妾をもつが、庶民は夫と妻、一対一なので匹夫匹婦という。そのような男であっても、志を固守するなら、かれが固守する志はいかなる力によっても奪うことはできない。志を奪われるなら（志をまげると）、匹夫にさえ値しない。

こうして、中華世界の知識人は、自分の生命よりも、自分の志を重んじるようになった。志の内容を吟味するよりも、志を堅持するか否か、自分にも問い、他人にも問う。

学に志す、とはいうが、農に志す、とはいわない。知識人が役人になり、役人をやめて田舎で農夫のような生活をすることはあるが、農家に生まれ、勉強もせず、農耕にいそしんでいても、それは農に志したことではない。

知識人のこだわりが、そこにある。知識人であるという自覚と名誉がこびりつく。

宰予^{さいよ}という門人が昼間、寝室で寝た。バクチでもよいから、なにかしなさいと、孔子は叱った。宰予には、自覚が不足していたのであろう。

そこで、中華世界に悲劇が生まれることになる。平凡な生活でよいとあきらめた人間、あきらめることさえ知らず呆然と生きている人間には、理解しがたいこだわりが、ドラマを演じる。とはいえ、あきらめていた人間、あきらめることさえ知らなかった人間が、あるとき、ある場所、ある局面において、逆転して、志に殉じることがある。

志は恐ろしい力をもつ。

志のうた 目次 — 名句・佳句による

まえがき

I 理想と悲劇 — 伯夷・叔齊から南朝まで

I

命 てんのさだめ 衰えたり 5
わしらの黍食うな 8
民も亦 また 勞れたり 12
后 あめがした 皇の嘉し樹よ 15
壮士 ますらお 一たび去かば 22
大 おお 風起り 23
少 わか 壯 きとき 努力めずんば 25
路 わがみち 窮り絶き 28
何 より に以てか 憂 おす 解さん 31
老 おい 驥 いたるめいば 櫪 うまや に伏るとき 38

身 このみ 鋒 するどきやいば 刃の端に棄つ 41
藻 うつくしきことば 流え 華の芬 はな かおり 垂さん 47
夜 ふけゆくよる 中 ねむ 寐ること能わす 50
終 このみはつるまで 身 うすきこおり 薄氷履むか 52
亭 すつくとそびえたつ 亭 とうせん 山の上の松よ 54
渴 のどかわ くとも 盗泉の水は飲むまじ 56
荆軻 けいか 燕 えんのくに の市に飲む 61
志 こころざし 有 おも り 騁 おも うさまのば 64
猛 はげしきこころざし 志 も 故より 常 いつも も在 そのみにあ り 67
途 ゆくてのみち 窮 ゆきつ るとき 能く慟 よ こえあけてな くこと無からん

や 69
竜の性りゆう うまれつき 誰なにびとぞ能く馴てなずけん 72

II 野心と志 — 唐代 81

風多はげしく響なくも沈とだえ易がち 85
前こしかたに古すぎゆきしひと人見えず 87
古いにしえよりこのかた来征ちのはてのいくさ戦いくたり幾人か回もとる 89
楼蘭ろうらんを破うちやぶらずんば終いつまでも還くにかえらじ 91
秦しんのとき時の明月かんの関せきしよ 93
吾われ衰えなば竟ついには誰たれか陳ことあげせん 96
会かならず当や絶頂ぜつちようを凌しのぎて 102
三みたびたずねし顧みんぱんとは頻繁ひんぱんなるかな天下はかりごとの計 104
安なにとかし広たてもき廬みずらみ千も万も間はしらのまあるを得て 107
昔かねて聞どうていく洞庭みずらみの水 111

退せけんからみまひきて耕きさんにも力わがちから任たえず 74
霜しもおくころ中能はなさかく作花はなせ 79

角つのぶえのひびき声ひと一たび動おこらば胡えびすのそら天あ曉あけん 113
好ねがわくはわが骨しよりきたちこむるかわを収めよ瘴はとり江の辺 116
黒き雲とりで城のしかかに圧とりでり城いまにも欲くだ摧くだけんとし 118
十年ひとより一の劍つるぎと磨とぐ 121
粒ひとつぶ粒ひとつぶ皆ことごとく辛あせみずたら苦あせみずたらすと 123
羞はじを包むねにおさめ恥はじに忍たうる是これ男児ますらお 125
忍むじきことよ雲しのをも凌しのぐ一寸の心きりと剪きりとる 127
他年いつのひか我われもし青帝はるのかみと為ならば 129

III 天下国家の志 — 宋から清末まで 131

やまかわ 江山 画の如し 一時多少 豪傑 135

死しては 亦鬼 雄と為らん 139

怒髪冠 沖げ 141

子を生まば 当に孫仲謀の如くなるべし 146

一任せたり 群芳の妬くに 149

家祭し 忘るる無く 乃翁に告げよ 151

中州 万古より 英雄の氣あり 152

破屋 疎煙 却数家 155

人生 古より 誰か 死無からん 157

夢に想う 西湖処士の家 160

岳王が墳の上 猿の吟う有り 162

只 清氣を留め 乾坤に満さん 164

芳洲の春草 誰が為に青き 166

国亡び 家破れ 何に之かんと欲す 168

雄師 十万 氣 呉を呑む 171

凡心 洗い尽し 留むるは 香影 173

芳菲 何処に在りや 175

我の願うは 東海を平ならしむること 177

如 此か 江山 179

任爾 東西南北の風 183

一簫 一劍 平生の意 185

奇士 殺す可からず 187

一格に拘れず 人材を降されよ 189

手に三 尺持ち 山河を定げ 191

馬を立む 長城 第一峰 193

我^{われ}は自^{みづから}すすんで 刀^{やいば}に横^{よこ}り 天^{てん}に向^{むか}いて笑^{わら}わん 196

地^ちを抜^ひき天^{てん}を摩^なで 独^{ひとり}立ちて高^{たか}し 198

IV 閉塞と開放 — 革命、そして現代 201

一腔^{このむね}の熱^{あつ}き血^ち 勤^{つと}めて珍^{めづ}重^{おも}せん 204

秋風^{しゅうふう}秋雨^{しゅうう} 人^{しゅう}を愁^{さう}殺^{ころ}す 206

踏^ふみ過^わりしは 桜^{さくら}花^{はな}第^{いく}幾^{つめ}橋^{はし}ぞ 207

誰^{なに}か 斯^{かの}人^{ひと}と 慷^{はげ}を同^{どう}しくせんや 209

酬^{むく}いらるる難^{むず}しくんば 蹈^う海^みげ^なるも 亦^{また}英^{えい} 212

一線^{ひとすじ}の陽^ひ光^{ひかり} 雲^うを穿^うちてさし 214

下賤^{いやしい}ことするの 唐^{とう}人^{じん}だけか 217

こは 望^たみ絶^たえ 水^{みづ}死^しにたる 沼^{しづみ} 226

問^とう 蒼^{そう}茫^{ぼう}たる 大^{たい}地^ちよ 誰^{たれ}か 沈^{よの} 浮^{うき}を主^{しゅ} 230

何^なぞ期^きらん 涙^{なみだ}は灑^そぐ 江^{かう}南^{なん}の雨^う 235

起^たて！ 奴^{やつ}隸^りにならぬ人^{ひと}びと 237

うたいおわって死^しんだなら 240

飢^う餓^がは 恐^{おそ}ろしい 243

ぼくは——信^{しん}——じ——ない 247

I 理想と悲劇

—— 伯夷・叔齊から南朝まで



志のうたの最初は、伯夷・叔斉のうたである。この二人が首陽山にこもって薇をとり、これを食べ、ついに餓死した話は、よく知られている。周の粟を食べるのをいさぎよしとしなかったのである。臣下である周が殷を倒したからである。

粟は穀物のことで、農夫が植えて収穫する。収穫がおわると、役人がきて、何分の一か、税としてとりたてる。俸給としても支給される。亡命して周にいた伯夷・叔斉は、しかるべき待遇を受けていたであろう。それを拒否したのである。

さらには、農夫に無心して粟をもらうことも、しなかったのである。粟は周という国家の制度のなかにくみこまれている。それで、制度にくみこまれていない、山中の野生の草、薇をとって食べたのであろう。薇といっても、いまわれわれが、わらび、と呼んでいるものとはちがうようであるが、山野に生える草であるというのが、眼目である。

農夫が植えたものではない。税とは無関係だ、これを食べるのは周という国家と絶縁しているのだ。これが、伯夷・叔斉の考えであつたろう。

自分の志をまげてはいない。堅持しているのだ。伯夷・叔斉は、誇りにさえ感じていたとおも

われる。

孔子もそれは、みとめていた。

子曰く、その志を降さず、その身を辱めざるは、伯夷・叔斉か。

『論語』微子篇

しかし、伝説がいくつかあって、その一つによると、「天が下、すべての土地は天子様のもの。あなたたちの食べている薇も、周の天子様のもの」と諷刺した農婦がいた。それで二人は薇をとることもやめ、餓死したという。『論語』では、「首陽山のふもとで餓えていた」とのみ伝えていて、餓死したかどうか判断できないともいわれる。粟を食べなかったことが、重要なのであろう。司馬遷の『史記』は「餓えて死んだ」と記す。

とにもかくにも、この兄弟は妥協せず、つまり志を低いところに降下させることをせず、堅持したのである。『論語』のなかで、孔子がこの兄弟に言及しているのが、四箇所にたつするのは、悲劇的でさえあるからであらう。

しかし、志はつねに悲劇的であるとは、かぎらない。支配者によって圧迫されている民衆が、役人を鼠と名づけて嘲笑している。嘲笑も志のありかたである。

広大な大陸を舞台に、政権や王朝が興っては滅亡した。

権力を握っても、いつまで続くか、保証はなく、権力を奪取しようとしては、仲間や部下の裏

切りが不安にならざるをえない。そこで、仲間にも部下にも圧力を加える。

知識人は、たいていが無力であったから、志をいだと、そのため志と圧力の板ばさみになった。そのさい、伯夷・叔斉という先輩の行動がかれらの胸に去来しなかったとはいえない。

志をいだいた人間は、志を堅持せざるをえず、志を堅持すれば、悲劇的な結果を迎えるのが、つねであった。理想がもたらした悲劇というべきであろう。

彼^{はるかなるか}の西山^{にしやま}に登り^あ兮^あ
その薇^{わらび}采^{つみと}る
暴^{よこしまなるちから}を以^{もつ}て暴^{よこしまなるちから}に易^かえ
その非^{あやまち}知^{さと}らず
神農^{しんのう}虞^ぐ夏^か忽^{たちまち}焉^{いずこ}没^{すがたけ}したり^あ兮^あ
われ適^{たずねゆ}きて安^{いずこ}に帰^{このみよ}せん
吁^{なんたることぞ}嗟^あ
徂^しなかな兮^あ
命^{てんのさだめ}衰^あえたり

薇^{わらび}を采^{つみと}る歌

伯夷^{はくい}・叔齊^{しゆくせい}

命^{てんのさだめ}

衰^あえたり